

2023年1月28日の富岡は晴天だった。特急を降りると広い空と何もないホームの間に、連絡橋が嘘のように立っていた。

小綺麗な富岡駅の待合室の隅には、空間線量計がかかっていた。毎時  $0.06 \mu\text{Sv}$  の数値を見て、つい  $0.06 \times 24 \times 365$  の計算をしてしまった。単純計算で累計年間  $0.5256\text{mSv}$ 。年平均自然放射線被ばく線量が  $2\text{mSv}$  であることを考えれば、全く「無視できる」放射線量である。しかし、私は計算をしてしまった。

低線量被ばくの健康への影響についてはさまざまな立場がある。年間  $100\text{mSv}$  を下回る被ばくについては、健康被害との因果関係を証明できないというのがワールドスタンダードだが、このワールドスタンダードを前提にしても、依然としてリスクに対してさまざまな立場が生まれうる。問題ない線量だとわかっていたとしても、つい計算して安全を「確かめてしまう」ことは、定量的リスク評価についてのアンビヴァレンスを物語っている。

このアンビヴァレンスについての対立は政治の炎となって燃え上がる。福島第一原発周辺中間貯蔵施設は、日本の戦後民主主義のひとつの帰結であると言っていいだろう。絶対安全とされた原子力発電所は、絶対安全であるにも関わらず東京などの都市中心部には設置されなかった。代わりに、貧しく低開発で「チベット」と呼ばれた福島県浜通り地域に林立した。これは「民主的」な決定であった。福島県は開発の遅れた浜通り地域を「原子力センター」にする構想をたて、それはほとんど実現した。地域の人々は原子力産業に従事し、地域の問題であった人口流出や出稼ぎは収まった。現在廃炉資料館となっている旧エネルギー館は、震災以前は市民の憩いの場の大定番であったと、とみおかアーカイブミュージアムの展示は語っていた。そして、3.11 が起こり、福島第一原発は壊滅した。たった4年で建設された原発は、事故後10年経っても廃炉の道筋すらつかない。「安全な」除染土の行き先も決まっていない。50年前に原子力センター構想を掲げた福島県は、30年以内の県外撤去を条件に中間貯蔵施設建設を容認した。

ドストエフスキーの「死の家の記録」に、最も恐ろしい刑罰は土を別の山に移してまたそれを戻すような全く無意味な労働を課すことだという記述があるが、実際に見学した中間貯蔵施設を前にしたとき、私はそれを思い出してめまいがするほどの虚脱感を覚えた。これが原子力リスクや「民主主義」がなせる業なのである。

ツアーの途中で、富岡を見下ろす高台にある葡萄畑を見学した。眼下には富岡の港と建物が建てられなくなっただけで広い低地が広がり、その向こうに福島第二原発が見えた。太平洋に山が迫り、透き通った冬空が夕日を湛える絶景に近いものをつい先日見たことを思い出す。夏に山陰本線を18きっぷで旅行した時のことだ。平地は狭く、人口は減少

し、産業がなく、貧しい。しかし、自然は豊かで驚くほどの絶景がそこら中にある。ここに原子力発電所を誘致しようと思った人々に、静かに思いを馳せた。